

# 序 章

平成 30 年度 SGH 完了報告書

(別紙様式3)

平成 31 年 3 月 29 日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 〒166-0012 東京都杉並区和田 2-6-29  
管理機関名 学校法人佼成学園  
代表者名 理事長 椎名 啓至 印

平成 30 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成 30 年 4 月 2 日（契約締結日）～平成 31 年 3 月 31 日

#### 2 指定校名

学校名 佼成学園女子中学高等学校  
学校長名 宮戸 崇哲

#### 3 研究開発名

フィールドワークを通じた多民族社会における平和的発展の研究

#### 4 研究開発概要

タイ・イギリス・ニュージーランド・オーストラリア・スリランカ・中国における  
フィールドワークを通じた多民族社会の平和的発展のあり方、それに対する関わり  
方を「異文化研究」および「国際文化」を通して研究を進めます。  
また、課題研究以外に「特設英語」を実施し、グローバル人材へ向けた意識や能力を  
醸成します。

## 5 管理機関の取組・支援実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程										
	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
運営指導委員会の開催						○				○	
タイフィールドワーク実施前安全確認	○	○									
スリランカ青少年交流実施前安全確認			○								

### (2) 実績の説明

#### 【運営指導委員会の開催】

進捗状況の報告と研究事業の更なる充実に向けた会議を行い、特に指定校認定期間終了後の本事業の具体的な取り組みについて議論した。

#### 【タイ・スリランカ等の安全確認】

課題研究としてのタイフィールドワーク、スリランカ青少年交流実施に向け、現地の関係団体と連絡を取り最新の状況を入手し、最善の対応が出来るよう現地の日本大使館とも協議し連携を図った。

## 6 研究開発の実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
1. 【異文化研究】 特進留学コース ニュージーランド留学（高校2年次）	○	○	○	○	○	○	○	○				
2. 【異文化研究】 特進留学コース シドニー大学研修 (高校2年次)	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
								○	○			
3. 【異文化研究】 特進留学コース ニュージーランド留学 (高校1年次)	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
										○	○	○

4. 【異文化研究】 進学コース、特進文理コース 日本スリランカ 青少年交流プログラム (事前・事後学習含む)	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
			○	○	○	○						
5. 【異文化研究】 タイフィールドワーク (事前・事後学習含む)	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
	○	○	○	○			○				○	○
6. 【異文化研究】 ロンドン大学研修 (事前・事後学習含む)	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
	○	○	○	○			○					
7. 【国際文化】 スーパーグローバルクラスで の国際知識授業の実施	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
8. 高大連携授業	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
			○	○			○	○	○			

## (2) 実績の説明

### 1. 特進留学コース 2年生 留学期間 11ヶ月 参加者 32名

クラス全員がニュージーランド北島に留学をする。今年度はネイピア地区、ハミルトン地区、タウランガ地区に分かれ、1校につき2名～3名で現地の高校でTerm1～Term4まで過ごした。留学中、生徒達はニュージーランドで課題研究を行った。各々のテーマに沿って研究を進めたが、段階をおって、教員が日本でメールやグーグルドライブを使用して指導をした。またTerm2終了後のクラス全員が集合する合宿では、研究要綱の確認をした上で、個別面談指導を行った。

### 2. 特進留学コース 2年生 シドニー大学研修 2週間 参加者 32名

シドニー大学での研修では、午前中はIETLS対策、午後はリーダーシップに関するワークショップやNGO関係者による講演会(The Fred Hollows Foundation、「Amnesty International」)ノートテイキングの授業、博物館研修、生徒のSGHプレゼンテーション、といった授業が実施された。

### 3. 特進留学コース 1年生 参加者 28名

出発前は、現地で想定されるホームステイや留学中のトラブルについてのケーススタディな

や心構え、英語研修など必要とされる研修を合宿で3回実施した。

また、現地での課題研究に向けての事前指導として、今年度は綿密なスケジュールをくみ、これまで以上に細やかな指導の体制を整えた。また現地での課題研究の調査を行う際に、量的調査だけに偏らないように、質的調査の方法について指導をした。

#### 4. 日本スリランカ青少年交流プログラム 参加者 16名

スリランカの青少年との交流により、多民族社会の共生や多宗教に関する理解を深める事ができた。姉妹校であるヴィサカ校の生徒との交流やムスリム・ヒンズー・ローマンカトリックなどの様々な宗教を背景に持つ青少年との交流やホームステイを通じて宗教と平和について生徒達が深く考えることができた。事前学習ではスリランカの生活文化を始め、ヒンズー教やイスラム教の生活文化について講演を行い、宗教について理解を深めた。

研修後は各々のテーマに沿って発表や掲示を行った。

#### 5. タイ・フィールドワーク 高校2年生 スーパーグローバルクラス 参加者 10名

チェンマイ・チェンライで1週間、バンコクで1週間のスタディツアーリを実施した。現地では山岳民族（カレン族）でのホームステイ、レジナカレッジ（私立女子高校）との交流、ホームステイ、各種NGOへの訪問、ILO（国際労働機関）を訪問し、フィールドワークを行った。フィールドワークのプログラム自体に大きな変更はなかったが、事前指導の段階で恵泉女子大学の学生との相互交流を図り、これから生徒達が研究しようとしている内容についてディスカッションを大学生と行うことにより、個々の課題研究に関してあらゆる角度から考えられるよう促す事ができた。

#### 6. ロンドン大学研修 高校3年生 スーパーグローバルクラス 参加者 10名

2週間の語学学校（St. Giles）での研修後、ロンドン大学SOAS校で4週間の研修を実施した。ロンドン大学SOAS校ではアカデミックライティング、教授による講義とセミナー、ディベートやディスカッションの指導をうけた。昨年依頼をしていた論文の個別面談指導を2回実施していただけた。また今年度の研修の新規に行った事として、NGO「Center Point」（ホームレスの支援を行っている）の訪問が実現できた。1年目の実施の際の課題を今年度はプログラムの組み立て方や内容に関して大きく改善でき、深化したプログラムとなり生徒の満足度も非常に高かった。

#### 7. 国際文化 スーパーグローバルクラス 1年次・2年次

<1年次>

今年度は、まず広く社会問題への関心を持たせることを主眼に置いた。1学期には「JICA地球ひろば」を訪問することでSDGsについて学び、自分の問題関心によって仮テーマを設定し、その仮テーマに基づいた新聞記事や書籍を読ませた。

1学期の終わりにはフィールドワークの基本について学び、夏期休暇を利用して各自インタビュー調査もしくはアンケート調査に取り組ませた。この調査結果を中心に、どのようにポスター発表にまとめていくかを2学期の授業で学ばせた。2学期最後の授業では、高校2年生との合同授業を実施し、お互いにポスターを批評しあった。また、横浜市立大学の滝田祥子先生にも授業に参加していただき、発表内容に関する講評をいただくことができた。

3 学期の授業は先行研究調査を中心とした。固まりつつある研究テーマに関する基礎情報を集めるため、学内の図書館で関連書籍を3冊以上選び、現在の状況、問題点、現在研究されていることを書籍から引用し、さらにそれらの書籍ではまだ研究されていないことを自分で指摘させ、最後の授業でプレゼン発表させた。この先行研究を2年生のタイフィールドワークに生かしていく予定である。

<2年次>

1学期は、タイ・フィールドワークの課題研究テーマを設定することを目的とし、事前学習として、長年タイでフィールドスタディー行っている恵泉女学園大学の協力を受け、学生による研究発表を見学させたり、教授を招聘して、タイの諸問題に関する講義をしてもらったりした。生徒達にとっては、さまざまな視点から研究テーマを考えるヒントとなつたようである。

2学期は、タイ・フィールドワークで収集したデータを基に、各課題研究の論文書きに着手した。その間、校内でポスター・プレゼンテーションの場を設け、生徒同士でお互いに見学させ、また広く校内の教員にも参観してもらい、生徒の研究を進めるにあたり、多くのアドバイスを受けた。

3学期は、課題研究論文を完成させ、また、英語でその内容をプレゼンテーションできるよう、ネイティヴ教員の協力のもと、PPTによる資料作りにも励んだ。これらの成果をもって、4月から始まるロンドン研修にのぞみ、より専門的な英語論文作成に向け更に弾みをつけたい。

## 8 高大連携授業

今年度は以下A～Cの3つの形式による授業を展開した。

### A. 大学教授による授業

形式は教授のご要望に沿う形とし、講義型の授業をあえて実施することが多い。大学1-2年生レベルを想定して講義して頂く。今年度は、恵泉女学園大学、青山学院大学、早稲田大学から計4名の教授にお越し頂き、「女性の美しさ～女性活躍時代にしなやかに凜として生きるために～」「1960'sロックミュージックから共生を考える」「障害と差別」「平和構築と人間の安全保障～グローバル市民の責任と役割～」というテーマで講義して頂いた。

### B. 大学生による授業

形式はワークショップ型授業。全体進行役および各グループのファシリテーターを大学生に担当して頂き、テーマに基づいて議論を進めて頂く。教員は事前に大学生代表と打合せを持って議論のテーマや流れを調整するが、授業内ではできる限り介入を控えるように心がけている。今年度は慶應義塾大学の学生を招いて「ペルーとボリビアの女性問題」「ウイグル問題」というワークショップ授業を実施した。

### C. 教員による授業

形式はワークショップ型授業。前週の高大連携授業の振り返りに加えて、担当教諭から話し合うテーマを提示し、議論を深める問答を重ねる。今年度は「グローバル人材は本当に必要か」「ゲノム編集ベイビーの何が問題か」などのワークショップ授業を実施した。

以上3形式の授業は、生徒達にとって総合的かつ学術的な教養を身につけるきっかけを得る場として十分に機能しており、リベラルアーツ教育の実践の場に進化していると考える。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

### 1) 中間評価において

○フィールドワークや留学の取組による完成度の高いテキスト「国際知識」を作成しており、評価できる。対象クラスが限られており、学校全体への取組が広がることを期待する生徒が主体的、協同的に関わる探求活動の充実や探求のプロセスを意識して取り組んでいく指導体制に期待する。全校体制での研究や、各教科での授業改善に向けて、更なる改革が必要である。

本校では SGH プログラムを全校体制（全教員含む）取り組みが不足していることに関して中間評価では指摘を受けていた。この指摘を受け、取り組んできた内容に関しては以下である。

平成 29 年度 研究発表会（参観は希望者）

平成 29 年度 SGH 全国高校生フォーラムで 文部科学大臣賞を受賞  
全校 受賞報告会の実施

平成 29 年度 ICAN 川崎 哲氏講演会 「平和と核兵器」

平成 29 年度 SGH TIMES （年 3 回発行）

平成 29 年度 タイ語・英語の HP 完成

平成 30 年度 グローバルリンクシンガポール 2018 体験報告会

平成 30 年度 トビタテ！留学 JAPAN 体験報告

平成 30 年度 SGH 校内研究発表会（参観は全校生徒）

平成 30 年度 SGH 全国高校生フォーラム出場生徒による 発表（全校生徒）

平成 30 年度 立教大学課題研究発表会 金賞生徒による発表（全校生徒）

平成 30 年度 SGH TIMES （年 3 回発行）

平成 29 年度に初めてスーパーグローバルクラスが 3 年間のプログラムを終えたため、その研究成果を披露するまで時間を要したが、その後シラバス等の見直しを含め課題研究の指導体制が安定し、課題研究の成果を全校生徒の前で披露する生徒が増加した。課題研究の自主的調査に限らず、トビタテ留学 JAPAN や筑波・香港大学グローバルリーダーズプログラムに申し込みを行う生徒や実際に参加した生徒もあり、生徒が主体的に探究活動等に取り組む傾向に確実に変化してきている。今年度は、全校での校内研究発表会を実施したことにより、多くの生徒にとって大変よい刺激となった。また次年度より、全校で課題研究に取り組むため、総合学習プロジェクト委員会を立ち上げ、1 年間かけてその内容を吟味してきた。

### 2) 成果

今年度の成果としては多くの生徒が外部大会に積極的に出場したことにより一定の成果を収める事ができた。

大会	人数	受賞
2018 グローバルリンクシンガポール	1 名	社会課題部門 2 位
SGH 全国高校生フォーラム	2 名	
国際理解及び国際協力に関する発表会	1 名	
立教大学課題研究発表会	16 名	プレゼンテーション部門金賞

第4回高校生国際シンポジウム	3名	ポスターセッション部門 優秀賞
SGH甲子園	3名	3月23日(参加予定)

## 8 5年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

○スーパーグローバルクラスは、既存の特進文理クラスのカリキュラムをベースとし、国際文化、異文化理解、特設英語、高大連携授業を学校設定科目とした。当初の研究開発の時点から国際文化と異文化理解は密接に結びつくような指導体制を整えていたが、最終的に3年次でロンドン大学で英語論文を仕上げることが目標となっていたため、実際には国際文化と異文化理解だけでなく英語の授業も関連付けて指導を行った。結果的に教科横断型の授業を実施する事ができた。たとえば国際文化の課題研究の事前指導をしているかたわら、英語の授業ではアカデミックライティングの際に必要となるスキルとして、データの読み方や表現の仕方、Critical thinkingを行いうるための基礎力を養成した。また背景知識やリサーチの仕方を教えるため、タイと日本の比較を様々な観点からエッセイとして書き、プレゼンテーションを行った。その他には、各々が決めた研究テーマに関して英語で留学生とディスカッションする機会を国際文化の授業の中で定期的に設けた。留学生に英語で説明することにより、コミュニケーション能力の向上につながるだけでなく、各自の研究の振り返りとなり新たな知見を得ることにもつながった。

○特進留学コースの既存のカリキュラムに設定されている科目「日本文化論」では、これまで実施してきた内容だけでなく、国内での課題研究をニュージーランド出発前に実施することにより、留学中にテーマを各々設定し進めていく上で大変有効な事前指導となった。

○平成30年度にはスーパーグローバルクラスに従来の文系型のカリキュラムだけではなく、文理横断型の学びを推進していくため、理系のカリキュラムを設けた。国際的な感覚をもち、明確な専門分野を持つことで、より国際社会で活躍できる人材を育てるためである。

### (2) 高大接続の状況について

#### 1) 連携内容の多様化

各大学との連携計画と実績は下表の通り。SGH指定5年間で、連携のありようが多様化し、効果的な教育活動を展開できるようになった。

	計画 (構想調書より)			実績		
	異文化研究	国際知識	課題研究以外 教育課程課外	異文化研究	国際知識	高大連携授業
恵泉女子大学	○	○	×	○	○	○
青山学院大学	×	×	○	×	○	○
ロンドン大学	○	×	×	○	×	×
チェンマイ大学	○	×	×	○	×	×

シドニー大学	○	△	×	○	×	×
会津大学	△	○	×	×	2017より休止	×

恵泉女学園大学とは、タイ・フィールドワークの総合的支援や高大連携授業における出張授業に加えて、学生の相互訪問やトップ交流などを今年度実現させた。青山学院大学とも学生の相互訪問を進めている。このように、SGH開始期と比べて、各大学と重層的な連携が実現できている。後述する新たな提携先の開拓だけでなく、既存の提携先大学との連携を不斷に検証し、効果的な拡充に成功していると考える。

## 2) 連携大学の拡充

構想調書で計画した連携 6 大学に加えて、この 5 年間で下記 10 大学・高専の先生や学生にご協力頂くことができた。

- ・ SG クラス「国際文化」での出張授業

近畿大学、中央大学、清泉女子大学、上智大学、横浜市立大学、仙台高等専門学校

- ・ SG クラス「高大連携授業」での出張授業

上智大学、早稲田大学、立命館アジア太平洋大学、慶應義塾大学

こうした大学の先生方の協力を新たに得ることができたのは、管理機関である校成学園の周旋と、現場教員の人的ネットワークを駆使した調整によるところが大きい。SGHとしての積極的な授業開発が進んだ例証と考える。

## 3) 中高連携による教育成果の還元

SG クラスでは、高大連携授業の経験を踏まえて、立場を逆転させて自分たちが近隣中学に出張授業を行う試みを今年度初めて実現した。7月 12 日（木）、SG クラス高 3 の 10 名が、世田谷区立烏山中学校にて中学 3 年生向けの授業を実施した。

授業前月の 6 月から、生徒達主体でどのような授業にするか、担当教諭の指導のもと SG 生たちには時間をかけて考えさせた。これまでの自分たちの探究的な学びの経験を生かせるよう、授業形式はワークショップ型、テーマは「タイの子ども達」とすることにした。そして、50 分間という短い授業時間でいかに中学生達を引き込む授業ができるか、細かく準備して臨んだ。授業は成功し、中学生達からは、「国際的な問題を表面だけしか見るのはではなく、たくさんの考えを深めていくことが大切だと感じました」「(高校で) どんな授業をしているのかすごく気になりました」などの感想が寄せられた。

本授業により、高大連携の教育成果を地域の中学校に還元することで相互に有益な効果が生まれたと考える。今後もこのような連携を継続していきたい。

### （3）生徒の変化について

#### 高校三年生対象アンケート

有効回答数 平成 29 年度 144 名 平成 30 年度 193 名

昨年度初めて SGH プログラムを終了した生徒が卒業をした。今年度も同様のアンケートをとり、集計を行った。生徒達がどのような成果が現れたかについて検証をする

1. 該当する 2や該当する 3 やや該当しない 4. 該当しない

	質問事項	平成 29 年度				平成 30 年度			
		1	2	3	4	1	2	3	4
1	高校入学時に比べて国際的な課題に対する興味、関心が増しましたか。	36.8	29.1	15.2	18.7	39.5	35.9	11.8	11.8
2	高校入学時に比べて、国際的な課題に関して学ぶ意欲がましたか。	33.3	26.3	20.1	20.1	35.9	34.9	15.9	14.4
3	高校入学時に比べて、異文化に関する理解や関心が増しましたか。	41.6	22.9	19.4	15.9	41.5	34.9	13.8	10.8
4.	英語で異文化の人とコミュニケーションをとる力	24.3	36.1	20.8	18.8	23.6	46.7	21.0	9.7
5	英字新聞や英語の website に書かれている社会問題を読み、それについて自分の意見を書く力	20.8	27.1	26.4	25.7	16.9	32.8	29.2	22.1
6	課題設定力・問題提起力	18.1	31.3	27.8	22.9	13.8	37.9	31.3	17.9
7	情報収集力・メディア活用力	17.4	36.1	23.6	22.9	13.3	39.5	32.3	15.9
8	情報分析力・論理構築力	14.6	36.1	25.7	23.6	12.3	40.0	31.3	17.4
9	行動力・現場での対応力	21.5	32.6	22.2	23.6	20.0	42.6	24.6	13.8
10	対話的なコミュニケーション力・傾聴力	23.6	32.6	25.7	22.2	21.0	43.6	26.2	10.3
11	プレゼンテーション力・表現力	19.4	32.6	25.7	22.2	16.4	34.9	33.8	15.9
12	集団の統率力・調整力	18.1	30.6	29.2	22.2	16.9	40.0	32.3	11.3
13	自己肯定感・自立心	18.8	34.7	25.7	20.8	14.4	45.6	30.3	10.3
14	多角的な視点・相対化能力	16.0	34.0	29.2	20.8	16.9	44.6	29.2	9.7
15	幅広い教養	18.1	34.0	28.5	19.4	13.3	34.9	31.3	14.4
16	広い知的好奇心	23.8	32.2	25.0	18.9	20.5	48.2	21.5	10.3
17	深い知的探究心	20.4	34.5	24.3	20.4	19.5	44.6	24.6	10.8

## (分析)

過年度比較として、顕著に変化が表れているのは、大別して国際的な課題に関心が増したことと異文化の人々とのコミュニケーション能力の2点である。国際的な課題に関心が増した理由の一つとして、今年度は全校でSGH課題研究発表会を行ったことにも起因するのではないかといえる。異文化の人々とのコミュニケーション能力に関しては、やはり生徒がただ単に海外プログラムに参加するだけではなく、現地でのフィールドワークでは主体的で能動的であることが前提となるため自然とコミュニケーションが生まれるものと想定する。また事前指導の体制をどのプログラムにおいても整えていることも起因しているといえる。

## (4) 教師の変化について

有効回答数 26/38

1. 該当する 2. やや該当する 3. あまり該当しない 4. 該当しない

	設問1	1	2	3	4
1	SGH事業にどのように関わられていますか	46.2			53.8
2	この5年間のSGH事業を通して課題研究への意識や関心が良い意味で変化した	61.6	30.8	3.8	3.8
3	この5年間のSGH事業を通して、探求的な授業方法を取り入れるようになった	30.8	26.9	23.1	19.2
4	この5年間のSGH事業を通して、指導方法の改善や授業力の向上に結びついた	46.2	38.4	15.4	0
5	この5年間のSGH事業を通して、グローバルな社会課題に関して関心が深まった	57.7	26.9	7.7	7.7
6	この5年間のSGH事業を通して、自身の研修の必要性を感じた	57.7	30.9	11.5	0
7	SGHの取組を実施したことにより、新しいカリキュラムや教育方法を開発する上で役立った	57.7	30.8	11.5	0
8	SGHの取組を実施したことにより、探求学習を進める上でおおきなきっかけとなった	53.8	34.7	7.7	3.8
9	SGHの取組を実施したことにより、教員の指導力の向上を意識する機会となった	34.7	3.8	3.8	8.0
10	SGHの取組を実施したことにより、教育活動を充実させることができた。	50.0	38.5	3.8	7.7
11	SGHの取組を実施したことにより、本校のグローバル教育の内容を充実させる事ができた	73.1	26.9		

上記のアンケートの分析をすると、教員自身の意識や関心に変化があったといえる。たとえば、「グローバルな社会課題に関しての関心が深まること」や「自身の研修の必要性を感じた」などの項目は概ね半数以上の教員の中に意識の変化があったといえる。一方で実際の授業に関しては、上記に比べると数値が低く、授業指導法の改善や向上に結びついても探求的な授業方法まで

には至らなかったようだ。この点に関しては、教員の自己研鑽が今後も求められる部分であり、時間をかけて取り組んでいかなくてはならない。このアンケートは総じて、この5年間のSGH事業を肯定的にとらえている傾向があり、国際社会に貢献できる人材育成のための本校のグローバル教育が前進したと7割以上の教員が感じているという結果となった。

#### (5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

- 1.これまで行ってきたSGH生徒を対象にした様々な取組を次の段階へ進めるために、  
今年度は探求学習プロジェクト委員会をSGH事業とは別のプロジェクトとして立ち上げた。次年度から全校で探求学習を実施していくため、プロジェクトメンバーで次年度の内容を検討した。8月に教員対象に課題研究に関する学内研修を実施した。「課題研究メソッド」を執筆されている岡本尚也先生による課題研究に関する講演により教員の意識が高まったといえる。また前述したとおり、全校生徒が介する場での課題研究発表会はSGH対象の生徒以外においても大変良い刺激となった。  
2019年度のコンセプトとしては、高校1年生は課題研究入門を行い、課題研究を行うまでの情報検索や研究テーマの設定等などのスキルを学び、ポスターセッションを最終的には全学年で行う。高校2年生は、企業探求コース（声と教育者 クエスト社）の協力を仰ぎ、企業が出すミッションに取り組む。2020年度以降は生徒に事前に希望調査をとり、教員の助言に基づいて自分自身の研究テーマを設定し論文を作成する。いわゆるゼミ形式で生徒を指導してゆく。
2. 2018年度の新入生よりIPADを全員貸与し、ICT教育を推進している。ICT利用により、これまでよりもアクティブラーニング型の授業に移行してきている教員が徐々に増加している。

#### (6) 課題や問題点について

1. タイ・フィールドワーク  
フィールドワークに赴く前に、課題設定を行い、先行研究の調査を行い、文献調査も行っている。しかしながら、実際に現地に赴き調査をする際に、課題設定によっては調査の実現性が低いケースや、リサーチクエスチョンの妥当性が低いものなども、フィールドワーク中やフィールドワーク後に気付くケースが散見された。生徒達の中には、そのような理由のため帰国後にテーマを変更するケースがあったが、そもそもどんなに文献で調べても課題設定は実際には現地に行った後でないと難しいとの専門家からの助言も頂いたが、海外フィールドワークの期間も短いため、調査という観点からは今後工夫が必要となってくる。

調査の仕方に関しても、ここ2年間は量的調査に重きをおく傾向にあったが、有効な回答やデータを得られないため、質的調査もするよう指導すべきだという議論もあったが、タイでは英語がツールとなるため、調査する相手が英語を話せない場合や生徒達の英語力が低い場合は、通訳が必要となりその点で直接調査の結果を得ることが難しく、その点でも課題が残った。

## 2. 論文指導

1年次より国際文化の授業でシラバスを作成し、2年間の中で体系的な指導を整えたが、一人の教員が継続的に指導し続けることは難しく、結果として指導にばらつきがでてしまった。平成28年度より課題研究メソッドのテキストを利用して指導をしているが、生徒の課題研究に対する着眼点は異なることは避けられなかった。このような課題から、平成30年度より一人の生徒の課題研究に関して複数の教員が集まり、生徒の研究課題の指導方法を共有することになり、課題研究を指導する上で一步前進したといえる。質の高い論文指導を行っていく上で、このような観点は必要だが、今後指導する対象の生徒が増えていくため、今後も大きな課題となる。

## 3. 日本スリランカ青少年交流

民族や文化や宗教の異なる青少年が参加し本校の生徒と交流を行うという点においてSGH指定の期間の中で大変実りあるプログラムとすることができた。しかしながら現地でフィールドワークを行い課題研究をするという観点においては、かなり難しかったといえる。やはり課題研究を生徒達が行うためには、体系的な指導が必要であり、かつカリキュラムに組み込む必要があったといえる。

## 4. 他の SGH 校との連携

生徒達の課題研究を披露する機会を公的な大会以外で提供する事ができなかつた。た。他の SGH 校との連携等を深め、生徒間の交流や課題研究を発表し、学びあう機会が少なかつた。中国宋慶齡プログラムは ICU 高校も参加しており、日本文化の発表をする際に協力して練習を行つたが、それ以外のプログラムに関しては実施できなかつた。

## 5. 海外フィールドワーク

本校では海外でのフィールドワークや研修を行つてゐるが、平成27年にタイのフィールドワークを実施する前にバンコクで爆破事件があり実施するかどうかかなり検討を重ねた。平成28年にはロンドン研修中に、ロンドン郊外でテロがあり、郊外であったため本校の生徒には影響はなかつたが、その後の修学旅行は中止になつた。平成29年にはスリランカでデング熱が流行し、夏の研修は延期となつた。このように国際情勢等の影響を受ける事が多かつた。

## 6. シドニー大学研修

今年度も研修における問題点というよりは、シドニー大学側の担当者との連絡のやりとりに関して難しさを感じた。研修実施の数ヶ月前に講義や研修の内容の要望をだしていたが、担当者が毎年替わり、確認がとれたのは実施の直前となり大変な時間がかかった。実際の研修では初日に NGO の代表の方より講義があつたが、講義を聴く際に必要な NOTE TAKING のスキルを学ぶ前に講義を受講することになり、このような点もリクエストしていたが実施していただけなかつたこともふまえ、今年度の現地での打ち合わせでは要望としてシドニー大学側にだした。また、現在はシドニーで研修を行つてゐるが、生徒達は一年間の留学中、ニュージーランドでのフィールドワ

ークを基に課題研究を行うため、実際にニュージーランドに住んでいる専門家からご指導を頂くことはより有効なアドバイスを得られるのではないかという引率者からの意見もあった。

#### (7) 今後の持続可能性について

今後もスーパーグローバルクラスは先述したように理系のプログラムを選択可能としたため、一部カリキュラムの変更をしたが、これまで SGH プログラムの中で培ってきた海外フィールドワーク、課題研究、有識者による講義等は、変わらず持続していく。

次年度は全校で課題研究に取り組む体制が整ったため、SGH プログラムを経験した生徒がそれぞれの課題研究に関しての発表や気付きを他クラスに伝えていくことや校内での研究発表会の中身を検討し、できるだけ多くの生徒が発表できる体制を整え、生徒間、教員間が『学びあう』環境づくりをしていきたい。今後の研究開発に関しては、この 5 年間の中で蓄積してきたノウハウを生かし、更に個々のプログラムの内容を充実させられるよう工夫をほどこしていきたい。

#### 【担当者】

担当課	国際部	TEL	03-3300-2351
氏名	宮川 典子	FAX	03-3300-2372
職名	スーパーグローバルハイスクール事業執行責任者事務局長	e-mail	kosei.sgh@girls.kosei.ac.jp